風の松原
一、21世紀に残したい日本の自然100選
一、21世紀に引き継ぎたい日本の名松100選
一、森林浴の森日本100選
一、21世紀に引き継ぎたい白砂青松100選

風の松原だより

風の松原を育てる市民の会
会長　畠　昭男
能代市上町能代ビル2F
電話（0185）52－3456
印刷
株式会社 北羽新報社
能代市西通町3番2号
TEL（0185）54―3150代

松原の緑を後世に

能代市 下浜に案内板設置

わが国の代表的白砂青松として年々脚光を浴びている「風の松原」を抱えている能代市は、本年度事業として、約千四百万円を計上。市民から強い要望のあった電話ボックス、案内板の増設、日本五大松原サミット宣言板などを新設する。今度の整備は昨年九月補正予算で計上され、市議会の議決を得て、このほど発注した。市公園緑地課の越前課長は十二月中旬、風の松原市民の会の畠会長らに新規整備事業について説明、協力の要請があった。

本度の整備は憩いの広場を中心に、公衆電話の設置、張り芝植栽、陸上競技場本部近くへトイレを増設する。このほか、市民の会から強い要望のあった同松原北側（下浜地区）へ案内板を新設することになった。また、唐津市、敦賀市、能代市などで開かれた日本五大松原サミットの際の、宣言板を市民憩いの広場に設置する。

また、市では今後の整備計画としては、管理棟やローラー滑り台、屋外ステージなどを考えている。

計画された電話ボックス、案内板などは二月早々着工の予定。

施設づくりに感謝

畠昭男風の松原市民の会会長の話　市当局や理解ある市民の献身的な努力で、風の松原の知名度も年々全国的になっている。松原の自然を損なうことなく、一人でも多くの市民から利用してもらうための施設づくりは難しいところだ。今後の整備については能代市と営林当局がよく話し合って、進めてもらいたい。市民が喜んで利用できる施設造りには、市民の会も喜んで微力を尽くすつもりだ。

今年の林内は少雪。市街地を豪雪から護るように老松は海側だけに雪を背負ってたたずむ

ゴミは持ち帰ろう

名実ともに〝白砂青松〟に

能代市民の皆様、風の松原を育てる市民の会の皆様・新年あけましておめでとうございます。

私達「風の松原を育てる市民の会」が、新たな誓いのもとに再スタートを切ってから三年目の新年を迎えることができました。私達会員の、共通の願いを結集した会報も、一昨年十二月に第1号。昨年八月に第2号。そして新年早々第3号と、発行回数を重ねることに、市民の会の共通目標である〝先人の遺産・黒松の砂防林を育て、守り続け、後世へ伝えよう〟―という、私達の運動が多くの市民に理解され、共鳴の輪が日増しに大きくなっていることは、心強い限りです。

また、会報を送ったわが国五大松原の関係団体からも会報発行に対し、多くのメッセージや護林に関したアンケート調査が舞い込み、反響の大きさにびっくりすると同時に、地球の自浄能力では、とても太刀打ちできないところまできている、環境悪化を思い知らされた感じを強くしております。

昨年秋の台風19号は、全国各地に大きな被害を与えました。台風をまともに受けた風の松原も、林内の老松が根こそぎ倒れ、アカシア数千本が無残な姿をさらしたことは、記憶に新しいところです。台風が能代周辺にさしかかったときの松原は、松の木が狂ったように大きく左右に揺れ、いまにもぶちのめされそうになり、とても恐ろしくて直視できなかったほどでした。台風の進路にびょうぶのように立ちふさがった砂防林のお陰で、市の中心街は他市に比べて被害が少なく、市民はいまさらのように風の松原の恩恵に感謝し、心の中で手を合わせる思いであったと思います。

今年六月、ブラジルでは地球サミットが開かれることになりました。自然破壊に対し、全世界の首脳が一堂に会し、その防止対策を話し合うことになると聞いております。自然を破壊した人類が、今度は地球を救うために立ち上がることになったのです。

そこで、新年に当たって、風の松原・市民の会の会長として市民の皆様にお願いがあります。お願いと言うのはそんなに難しいことではありません。

畠昭男会長

「風の松原を永久保存するために、林内にゴミ類を捨てないで下さい」―ということです。

風の松原は、四季を通じて実に素晴らしい市民の憩いの森です。ところが林内を散歩する市民やジョギングする中・高校生。奇特にも林内のゴミ拾いをして下さるボランティアの市民にとって、一番の悩みは、林道の両側に、ゴミ類をポイ捨てされることです。

このゴミ類のポイ捨てさえなくなれば、能代市民ご自慢の「風の松原」は、名実ともに全国に誇る日本の自然、日本の名松、森林浴の森、白砂青松の各百選に恥じない「風の松原」となることでしょう。

92地球環境年の今年こそ、市民の皆様のご協力を得て、風の松原からゴミ類の一掃をぜひ実現したいものだと思います。（談）

大気監視局を増設

電源交付金を活用して

能代市は昨年末、能代火力2号機着工に伴う電源交付金を利用した整備計画案を市議会全員協議会で説明した。市への交付金総額は十三億二千万円。

交付金の使途は、市内の道路、排水路など市民から要望のあった市政全般に及んでいる。その中で、来年六月の能代火力の運転開始に備えて「大気監視装置」を設置することになった。

大気環境を監視するこの装置は、すでに県が能代保健所、能代工高、浅内小、浅内診療所などに設置。東北電力も市内三カ所で独自の観測をしており、今度市も常盤、向能代地区に観測局を新設。県の観測局とオンラインで結び、運転開始前、開始後の大気汚染を監視。そのデータを市庁舎内に設置する表示装置で市民に公開することになっている。

能代市民憲章

わたしたちは、広い日本海、緑の松原と豊かな流れの米代川に恵まれ、港と木材のまちとして栄えてきた能代市民です。

わたしたちは、この美しい風土と先人の遺業に深く感謝し、明るく住みよいまちを築くために、この憲章をかかげます。

一、自然を愛し、緑をそだて、美しいまちをつくります。
一、健康で、働くことに喜びをもち、活気あるまちをつくります。
一、学ぶ心を育て、薫り高い文化のまちをつくります。
一、家庭を大切にし、心のふれあうあたたかいまちをつくります。
一、きまりを守り、安全で清潔なまちをつくります。

平成二年十月一日制定

環境と開発に関する国連会議（六月一日、ブラジル）＝「地球サミット」のシンボルマーク

市民の会入会歓迎

「風の松原を育てる市民の会」は広く個人、法人（事業所）会員を募集しております。

入会希望者は、ハガキに住所、名前、年齢、電話番号を明記の上、能代市上町六の六「能代郵便局・私書箱2号」風の松原事務局宛、投稿下さい。会報を送付致します。会費千円（年間）は総会の際、頂きます。

「会報」原稿を募る

市民の会では、会報に掲載する原稿を募集しております。

内容は、風の松原に関することならなんでも。

投稿は能代郵便局私書箱2号「風の松原」事務局へ。

「風の松原」

● 基本方針

後谷地国有林は、能代市民にとっては先人から受け継いできた大きな遺産であり、次代へ引き継いでいかなければならない貴重な財産である。

当該国有林は、保健保安のほか飛砂防備，防風、防火などの機能を有しており、鳥獣保護区域にもなっている。

整備にあたっては、これらを十分認識したうえで、国有林のもつ機能を損わない範囲におけるものとし、ありのままの自然を有効に活用することを第一義に、森林や緑に対する理解とふれあいを得られるレクリエーションの森として利用，活用をするための整備を行うものとする。

● 整備区域

能代海岸の砂防林は、日本海に沿って南は市内浅内から北は市内落合まで約14km、その面積約760haの松林で、そのうち国有林は米代川を境に後谷地地内302.1ha、落合大開地内40.5haの2ヶ所342.6haで残りは民有林である。

緑の樹海は、すべてクロマツ林で、その数700万本といわれている。

本計画による整備対象とした個所は、市街地のすぐ西側にある後谷地国有林の保健保安林指定地内、延長3km、幅員1km，約300万本の松が整然と並び，樹齢100年を超す大樹もある242.3haとする。

三保の松原

気になる"大気汚染"

火力建設で清水市は反対

静岡県清水市の天下の名勝「三保の松原」近くに、中部電力石炭火力発電所（百万㌔㍗二基）が計画されている。昨年十一月二十一日付の朝日新聞（全国版）によると、地元清水市では、関係自治会が中心となって「羽衣伝説の三保の松原を枯らすな！」と、設置に反対。一方、清水市は「建設によって経済的波及効果は大きい！」と、誘致に積極的。双方がっぷり組んでの賛成、反対運動で、肝心の建設計画は暗礁に乗り上げた格好。「三保の松原」と石炭火力建設計画は、能代火力と「風の松原」と、立地、気象など似たような条件下にあるという。今度の朝日新聞の報道で、私達は来年に迫った能代火力の操業を前に、「風の松原は松枯れの心配はないのか…」といった素朴な疑問を抱くのは当然。今一度原点に返って、市民の健康、松枯れ問題などについて、将来に禍根を残さないよう見直したいものである―。「風の松原を育てる市民の会」では昨年十二月、朝日の記事を読んだ能代市民に、「三保の松原と石炭火力建設―。風の松原と能代火力―をどう思いましたか…」―感想を聴いた。（五人は匿名希望）

大丈夫か"風の松原"

能代もひとごとでない?

朝日新聞の記事を読んだ能代市民の反応はさまざま―。石炭火力基地化計画に対し、清水市民は反対を表明。一方、能代市は全市挙げて誘致運動を進めた。

清水市と能代市は、建設計画に十年以上の差があり、従って、環境問題をはじめ経済的諸問題が比較にならない。能代市が誘致に乗り出した当時、市内の経済界はどん底時代。一方、清水市の場合は、バブル経済が最高調の時代。このように経済問題一つを見ても、天と地の違いがあった。

このため、能代市民が誘致に賛成したからといって、公害問題に関心がなく、知性が低く、清水市民が誘致に反対しているからといって、公害問題に市民の関心が高く、知性がある―ということにはならない―というのが、能代市内の大方の見解。

能代市民の"街録"による意見も、ほとんどが、公害には高い関心を示している。能代火力と締結した公害防止協定に対し「操業後も市民監視は続けて行く」と異口同音に答えている。

清水市の商工会議所の代表団が、昨年夏、能代火力を視察した。視察目的の一つに「石炭火力の誘致に当たって、能代市が全国的に一番抵抗、つまり反対運動が少なかった。その秘けつは何んだったのか…」ということを探ることにあったと言われていた。これに対し、能代商議関係者がいろいろ説明したが、清水市視察団が最後まで納得できずに帰ったという。

「能代市は、他市とは違って、東北電力の電力基地構想に対し、いかなる名目にしろこれまで一円の見舞金も受けていない」というのが自慢のタネ。しかし、市議会の一部には「着工が当初計画より遅れ、市固定資産税に"狂い"が出た分だけでも、東北電力から何らかの名目でもらうべきだ」―という意見もあり、議会内でくすぶり続けているのも事実である。

能代市は、法律で決まっている電源交付金以外は、政府からも東北電力からも一円の交付金もなく今のところ、「武士は食わねど高楊枝（たかようじ）」的"心意気"で通している。

どうなる「三保の松原」そばの発電所

静岡県清水市の石炭火発建設計画

「松枯れる」VS.「影響ない」

▼自治会 酸性雨を調査

▲清水市 波及効果試算

▲中電 重役が常駐に

反響呼んだ朝日新聞全国版（1991年11月21日付）＝朝日新聞社提供＝

識者の声

貴重な"警鐘" 厳しい監視を

藤井　慶昭

「風の松原」の大先輩格である、清水市の『三保の松原』の隣接地への火力発電所建設計画に対し、地元住民の間から「反対」の声が上がっている。

その反対の理由は「石炭火力発電所が排出する硫黄、窒素酸化物が酸性雨となって、松枯れの一因になる」ことを懸念しているためだ。

そして、さらに気掛かりなのは、この三保の松原を調査した広島大学の中根周歩助教授（森林生態学）が「現在でも松の樹勢が低下しており、大気汚染の影響が考えられる。地球環境時代に石炭火電建設は逆行している」と厳しく批判している点だ。

これらに対して電力側は「煙突の高さを二百メートルにし、最新技術の導入により、硫黄酸化物や窒素酸化物、ばいじんの大半を除去、周辺環境への影響は無い」と反論している。

これは、かつて社会情勢や自然環境に対する認識の相違があったにせよ、低迷する能代市の起死回生への決定打として、一部の反対意見を飲み込むがごとく、火電建設誘致を全市挙げて大歓迎した私達に、貴重な警鐘を与えてくれたものとして受け止めるべきであろう。

目先の利益に酔いしれて、先人が築いてくれた、かけがえのない偉大な財産である「風の松原」を、もし枯らしてしまったら誰がその責任を負うのか。

言うまでもなく、それは全市民に科せられる。それ故にこそ、改めて「風の松原」に対して、全市民が関心を深め、厳しい監視の目を怠ってはならない。

（浄明寺住職）

公害防止協定 守り歯止めを

袴田　勝三郎

静岡県清水市の景勝地「三保の松原」の近くに、中部電力が石炭火力発電所建設計画を進めていることを朝日新聞の報道で知った。清水市当局はこれを容認し、また議会も立地促進決議をしたと報道されている。

これに対し、地域住民は、松原を守るため、反対運動を盛り上げ、今や計画が宙に浮いているという。

この報道を読んで、広大な風の松原の隣接地に、東北火力発電所を建設している能代市と、全く同じ環境におかれていることを知った。

能代火力も昭和五十二年以来、いろいろ紆余曲折を経ながら、その後順調に工事が進み、現在では各種施設の建造物が林立している。能代市の場合も、もちろん安易に建設に同意したのではなく、特に公害問題については、議会の中に調査特別委員会を設置し、長い期間、調査研究し、その結果、意見書にまとめ、県、市、並びに東北電力側に提出している。また、この意見書に掲げた条件を基に、公害防止に関する協定書を結んだと記憶している。

しかし、実際に発電所が操業してみなければ、本当の公害の有無は測れないのは当然である。能代市当局も地域住民も発電所の稼働に大きな期待を寄せていることは否定できないが、その半面、公害については、これからが、厳しい監視が必要ではないだろうか。地域住民の健康と風の松原を守るためにも…。

（元能代市議）

人類の未来は"緑"の保全に

高橋　陽子

能代に住んで十年。風の松原の大きさに感嘆し、自費で砂止めをしてきた人々の姿を想う。最近、能代火力一号機に脱硫装置が付かないことを知った。環境問題がクローズアップされていると同時に、驚きた。

山の緑が川や海の生き物を育てる。熱帯雨林の伐採や砂漠化が異常気象をもたらしているらしいと報じていた。人類の未来は、まさに緑にかかっている。その緑を脅かす行為は避けたい。

環境白書によれば、日本のエネルギー有効利用率は35%だとか。効率を上げる研究に、どれくらい力を入れているのだろう。電力需要はこれまで確かに伸びてきたが、これからも今までのような伸びを想定することが許されるのだろうか。

地球に住む私達は今、広大な実験場の中に置かれていることに気づいている。私達のくらし方が問われているのだ。

（能代市消費生活モニター）

愛情持って関心

商店主　男性（六六）

石炭火力の誘致に当たって、清水市民が、三保の松原の保存のために反対しているという新聞記事はある程度理解できる。問題は、どの市でもなるべくなら誘致したくない企業だとは思う。

問題は、清水市民が三保松原に抱く、感情というか思いというか。それと、能代市民の風の松原に持つ思いの程度の問題だろう。風の松原は脚光を浴びてからまだ十年にはならない。いわば歴史が浅い。それに対し、三保の松原は、伝説的にも全国区で、清水市民にとって市民の心の寄りどころであり、代表的観光地である。能代市民も、清水市民が「三保の松原」に抱く、愛情的関心を「風の松原」に持つべきである―ということを教えられた気がしてならない。

公害排出はご免

主婦（二九）

朝日の記事は読みました。よく分からないというのが実感です。ただ、同じ石炭火力でも、清水市民は反対し、能代市民は積極的誘致に賛成したという両市民の違いがよく理解できないし、そんな素朴な疑問を持ちました。

石炭火力の排煙などが、付近の環境に、全く影響ないということはないと思います。能代市は当時、能代火力を誘致しなければならなかった事情があったと思います。しかし、今後は公害排出企業の誘致はご免です。

人口が減っても、市勢が少しぐらい沈滞しても、公害工場は来てほしくないし、誘致は困る。小じんまりした能代市でも、明るく、健康都市なら、将来そんな能代を求めて能代への人口移動は必ずあると信じたい。

東北電力は市民の知らないうちに高い煙突から公害物質を天空へ放出するという企業ではありません。家庭へ送られている電灯のように市民に明るい光を送り続ける東北一の優良大企業であると信じて疑いません。

企業は良心守れ

化粧品店主　男性（四四）

能代火力が「風の松原」にどのような影響を与えるか、という問題は将来の問題である。化学に弱い私が今、軽々に答えのできる問題ではない。記事だけだと清水市と三保の松原の関係がよく分からない。しかし、能代火力と「風の松原」の地理的条件から見ると、問題は東北電力の企業良心の問題にしぼられるということだ。

能代火力の誘致運動当時、将来の風の松原に対する影響を考えた先輩はほとんど居らなかったようだが、仮に居ったとしても、大きな誘致のうねりの中では、慎重論は埋没してしまったと思う。

いまから言えることは、この科学時代、公害物質を出さないよう企業は努力し、市民は監視を続ける関係で、公害を最小限度に食い止めるというのが、最善の対策だと思う。

金惜しまず対策

運輸会社役員　男性（六〇）

能代市と清水市では各種の事情が違う。能代市は能代火力の誘致で、電源交付金や建設工事などで稼ぐことができた。火力建設ブームと呼ぶほどのことはなかったかもしれないが、一部の関連業者や企業は稼がせてもらったと思う。

ただ、火力が来ると能代の景気は良くなると過大に予想している人達が居るようだが、それはどうかなあ―と思っている。また、火力建設ブームと公害の問題は全く別であるということは言うまでもない。東北で一番でっかい企業の東北電力が、金を惜しんで、各種の防止設備を怠ることはないと信じたい。

許容範囲で我慢

団体職員　男性（四七）

大型企業の誘致は、各面にプラス、マイナスが起こり得る。そのマイナス面が市民の健康面や風の松原などに大きく悪影響を与えることになると問題だが、常識の範囲内であれば我慢しなければ―と思う。

石炭火力の誘致に際し…能代市民が積極的に賛成し、清水市が積極的に反対している比較の問題だが、それは、時代的背景と両市内の産業界の問題が介在していると思う。誘致に賛成した能代市民か、知的水準で清水市に劣っているとは思いたくない。

酸性雨

秋田県にも越境汚染

日本海岸一帯で基準超す

「冬季間、中国の濃度の高い酸性雨（雪）が、庄内地方へ“越境汚染”…」―と報道された昨年十二月十九日付の河北新報は、秋田、青森、山形県の日本海側に住む人たちへ衝撃を与え、酸性雨（雪）に対する関心が一気に高まっている。

中国の石炭燃焼が原因

同紙によると、山形大学農学部の上木勝司教授らの調査で、冬季間、山形県庄内地方（酒田市、鶴岡市）に、濃度の高い酸性雨（雪）が降っていることが分かった。これら酸性雨（雪）の発生源は、中国の石炭燃焼によるもので、それが季節風に乗って、日本海側の各地に“越境汚染”をもたらしている―というもの。この結果、環境庁の酸性雨調査と照合してみると、青森県津軽地方から庄内地方まで軒並みに酸性雨（雪）が降っていることがほぼ裏付けられたことになる。同教授らの調査は、昭和六十三年一月から平成二年五月までの間、鶴岡市、朝日村など演習林内の百八個のサンプルから採取した降水雨（雪）を分析した結果、PHが五・六以上は一例だけ。あとは降水全部が酸性化されていた。調査結果について上木教授は「冬季間、中国大陸の汚染物質が強い北西の季節風によって運ばれ、庄内地方の降水が越境汚染されている状況証拠と言える」と語っている。この結果、秋田県の日本海一帯も、これらの酸性雨（雪）によって越境汚染されていることは間違えないものとみられている。これらの越境汚染の対策として、同教授らは発生源の中国に対し、資金と技術援助によって防止対策が必要である―と訴えている。また、日本物理学会、日本菌学会会員の平山達男氏＝能代市上町＝は、河北新報の記事を読んだ感想を次の通り語っている。

土壌にも強い影響

平山氏　白砂青松に対策を

河北新報の社会面に「庄内地方の酸性雨は中国の石炭燃焼が発生源」――と報道されていた。これはかなり前から分かっていたことで、山形地方ばかりでなく、日本列島全般が被害を受けており、山形大の測定はこれを立証したものだ。チェルノブイリ原発事故のとき、放射性物質が気流に乗り、中国大陸を経て日本列島に直撃しており、当然秋田県内にも降っている。

中国が利用しているエネルギー源の内訳は石炭が71%、原油23%、天然ガス3%、電力3%と石炭の比率が圧倒的に高く、火力発電所・小規模ボイラー、および各家庭の石炭ストーブまで膨大な量の石炭が燃料として使用されている。しかも、旧式であるため、燃焼効率が極めて悪く、ことに重慶地区の重工業地帯からの大気汚染が大きいされている。

「臭いものは元から絶たなきゃダメ」―という言葉がある通り、汚染の発生源を極力押さえなければ、簡単に軽減できないものだ。その対策として技術援助が必要であるが、技術の面ばかりでなく政治的、経済的問題があり、解決には長い時間が掛かる。

能代二中の夏井先生によれば、能代市周辺では雨水が酸性度、PH5.0～PH5.3の数値が出ている。春先の残雪であれば、もっと強い酸性値を示す。積雪の表面から水分が気化するので、濃縮されて酸度が高くなる。

土中には、驚く程の多数の微生物がおり、この土壌微生物は落葉を分解し、元の無機物に還元している。「土が生きている」とか「土が呼吸している」と言うのはこのことで、植物は微生物と共存共栄の形にある。これが酸性雨によって膨大な量の微生物が死滅し、私達の目に見えないところで大きな変化が起きており、それがやがて松も枯れて行くこととなる。

一般には日本の土壌は酸性土壌が多いので日本の植物は酸性雨には強いと言われている。しかし、酸性雨がこれ以上降ると計算するなら、わが国の自慢である白砂青松は将来、大被害を受けることは確実で、早急な対策が必要である。

私は今年六月の地球サミットに大きな期待をかけている。

環境庁で生態系調査

環境庁は、昨年八月から二年がかりで全国で降っている酸性雨が森林など生態系へ与えている影響調査を開始した。

昭和五十八年から六十二年にかけて行われた第一次の酸性雨調査では、日本でも全国的に酸性雨が降っていることは確認されたが、植物など生態系への影響はないとされてきた。

なぜ、日本国内で被害が出ないのか。酸性物質を排出する産業活動が始まったのが遅い、土壌のアルカリ度が高く、酸性雨を中和する能力が高い、その土の層が厚い――などのためという。しかし、その土壌能力にも限度がある。対策を立てるためには実態が解明されなければならない。

今回の森林生態系への影響解明調査は昭和六十三年度から始まった第二次酸性雨対策調査の一環。この第二次調査では、全国六か所の湖沼のパイロット・モニタリングや壱岐、対馬などの離島での酸性雨分析など総合的な酸性雨調査が、平成四年度までの五年計画で行われる。

かつては五百万トンもの硫黄酸化物を排出していたわが国は脱硫装置の設置などの公害対策の結果、今では五分の一程度に減少しているが、隣国の中国では今でも脱硫装置もないまま硫黄酸化物の原因になる石炭が主力エネルギーという現状だ。多国間にまたがる酸性雨の解決は難しい。

庄内・冬季の酸性雨

発生源、中国の石炭燃焼

山形大の上木教授ら　降水（雪）分析で裏付け

季節風に乗って越境

酸性雨（雪）調査のサンプル採取＝山形県朝日村、山形大学農学部上名川演習林

「汚染対策に技術援助を」

河北新報が報じた酸性雨汚染の記事（昨年12月19日付）＝河北新報社提供

観測に鋭い視線

能代市内の豆科業者活躍

“酸性雨観測に豆科学者の鋭い視線”―。能代市では、来年六月の能代火力運転開始に備え、昭和五十八年度から市庁舎で観測をはじめている。このほか、平成二年五月からは、市内六中学校の協力を得て、市内全域の酸性雨の状況観測を開始している。

観測は科学部が中心となって実施しているもので、各校ともグラウンドわきに設けてある簡易雨水採取箱にたまった雨水を、PH試験紙、PH計などを使って酸性雨の濃度を記録している。

各校とも観測の経過については、データを集計していないとの理由で、明らかにしていないものの、「かなりの濃度の酸性雨が測定されている」ということは事実のようだ。

自然環境に恵まれ、“自然そのまんま”の能代山本地区にあっても、年々環境破壊が進んでいるといわれているだけに、市内中学校の豆科学者達による観測結果は注目されている。

キノコと放射能汚染

浅内地区　キンダケは汚染

＝平山達夫氏が警告＝

鉱さい処理場周辺も危ぶない

風の松原は、能代市民の憩いの松原である。私もよく散策するが、昨年秋のキノコの発生は、一般に少なかった。数年前から気に掛かっているのは、キノコの放射能汚染問題だ。これは、かつて、度重なる中国、ソ連の核実験の影響と思う。

昨年、風の松原で採集した通称シモコシ（能代地方では通称キンタケ）を、弘前大学に送り放射能の測定を頼んでいる。一昨年の分析では、一キログラム当たり、一〇〇ベクレルのセシウム一三七の汚染があった。原子核が一秒間に一回崩壊することを、一ベクレルと呼んでいるから、一秒間に一〇〇回崩壊していることになる。セシウム一三七は自然界には存在しないし、核分裂によってのみ発生する。

また、核が崩壊するとき、電子を放出してバリウムに変化するが、そのとき〇・六六メガ電子ボルトという強いγ線（ガンマー）を放出する。これは病院でよく使用する、コバルト60の原子核一個の崩壊のとき発生するγ線のエネルギーの約二分の一の強さで、照射線量率では約四分の一である。従って、食品の中に入って体内に入った場合、体内被曝となり、しかも、セシウムは生殖腺に集中するほか、筋肉中に蓄積する傾向を有する核種である。厚生省の暫定基準三七〇ベクレルからみると、少ないとはいい、将来のことはだれも分からない。セシウムの半減期は三十年、その放射線は、細胞の生命をつかさどる遺伝子を構成する物質、DNA（デオキシリボ核酸）に損傷を起こし、それが、十年、二十年後に重大な結果を発生させる可能性があるからである。

キノコ類の中でも、地上に発生するキノコは、一般に重金属を集めるクセがあり、また適当な量の重金属のある所に、よく発生しやすいと言われている。尾去沢のマイランド付近の山は、アミタケ（通称イグチ）がよく発生しているが、これは付近の山々がミネラルを多く含み、キノコの発生に適しているためである。

風の松原の近くにある黒鉱の鉱滓処理場（現在は埋め立て中）の廃池の下の方の松林は、廃池の上の林より、キノコの発生が良いため、シーズン中はキノコ採りが殺到する。これは、鉱滓処理場の水が重金属のスープのような役割を果たし、このスープが、下方の松林に浸透しているため、キノコの発生にいいらしい。

しかし、ここのキノコは食べない方がよい。その理由は、必要以上に重金属に汚染されている可能性があるほかに、毒性の強いものが入っているかもしれない。最近、茨島付近の井戸水が重金属に汚染されていると騒いでいるが、鉱滓処理場からの影響の可能性が考えられる。地下水は長い間に遠い所まで影響を与えるものだ。

鉱滓の中には、鉄、銅、鉛等のいろいろな金属の外に砒素も入っている。最近、雨も酸性になっているため、仮に酸が入ると、金属に作用し、水素を発生させる。そのとき、その近くに砒素があると、恐ろしい砒化水素（アルシンとも言う）と言う毒性の強いガスを発生する可能性がある。あの気に掛かる、ニンニク臭のある臭気は、以前は、ことにひどかったものだ。砒化水素は、無色透明で、特長はニンニク臭のある気体だからだ。人間の血のヘモグロビンと親和性が強く、溶血作用があり、皮膚からも吸収されるし、めまい、頭痛、のどの刺激があり、長時間では10PPMで死亡すると言われている。実際、私はキノコの採集で、あの近くで気分が悪くなり、あわてて逃げた経験がある。

風の松原は、私達の賢明な先人達の血のにじむような努力によって、造り上げられたものだ。あの鉱滓処理場は仮に埋め立てても、あの臭いの残る限り、人はあまり近づかない方がいいと思う。

（日本物理学会、日本菌学会会員）

松原の四季に心地よい汗

森林浴を満喫
健康マラソンに900人
風の松原フェスティバル

潮風と緑のシャワーで森林浴―。能代市民憩いの広場・風の松原は、昨年も四季を通じて、訪れる人達の歓声が林内いっぱいにこだましていた。わけても秋の恒例行事となった「風の松原フェスティバル」「松原健康マラソン」には、県内外から千人を超える松原ファンが訪れていた―。

風の松原を舞台とした第五回能代・風の松原健康マラソン大会は昨年十月六日、県内外から八百九十九人が参加して、秋晴れのもと健脚を競った。

松原内のコースに競う健康マラソンは年々参加者が増え、昨年は前年より五十一人も多かった。最年少は二歳の相原はるかちゃん、年長者は八十一歳の木村一二さん。ペア競走には、親子、兄妹、夫婦、恋人―など九十四組百八十八人も参加。三㌔、五㌔、十㌔のコースを力走していた。

健脚を競って松原コースを駆けめぐる市民たち

この日の林内は、秋日和がさし込み、絶好のマラソン日和。コース上では、子供達に「もっと早く…」と激励されるお父さんやお母さんの姿。恋人の手を引っ張って、頼もしさを"誇示"、さっそうと力走の彼氏。ほほ笑ましい風景がいっぱい。クロマツ林は終日、歓声がこだましていた。

優秀ロータリアン
畠会長を表彰

能代ロータリークラブに所属している風の松原を育てる能代市民の会会長畠昭男氏=能代市商運理事長=は昨年十月初旬の地区大会で、優秀ロータリアンとして表彰された。

畠会長の表彰理由は、長年にわたっての奉仕活動―となっている。特に、風の松原を育て、後世に伝えようという献身活動が表彰の対象となった。同会長は風の松原の市民団体の副会長、会長として、市民運動の先頭に立ち、運動の推進役としての功績が認められたもので、今度の受彰は畠会長はもちろんのこと、風の松原市民の会としても喜ばしいことである。

木材青年ク　ベンチ贈る

能代木材青年クラブ(中田雅俊会長)は昨年暮れ、秋田杉で作った自作のベンチとテーブル三組を能代市に贈った。市は早速これを風の松原内の憩いの広場に設置した。

同クラブは、市民に、木材にもっと関心と良さを知ってもらおうと、丸太を加工したベンチを作り「風の松原内に設置してほしい」と寄贈したもの。贈られたベンチは、杉皮をはいでいるだけで、丸太の曲がりを生かし、松原にマッチしており、春から松原を訪ねる人たちに大いに利用されそうだ。

「うらやましい」と感嘆
大館歩け歩け協会　松原と画廊を散策

森林浴と潟湾画廊の評判を聞きつけた大館市の歩け歩け協会は、昨年八月二十五日、風の松原とはまなす画廊をコースに、第三十三回万歩ウオークを楽しみ心地よい汗を流した。

この日は好天。会員三十人は松原内のさわやかな空気をいっぱい吸い込み、森林浴を満喫。会員の一人は「市の中心街にこんな素晴らしい松林…うらやましい…」と言いながらテクテク。海水浴場までの約十五㌔のコースを楽しんでいた。

中尊寺でも薬剤散布

岩手県の中尊寺は松くい虫防除の薬剤散布を減らすことを検討している。今後、町との間で具体的な防除対策を考える。

中尊寺境内には、樹齢二百―三百年の老松があるが、松くい虫の被害で毎年十本ほど伐採される。昭和六十二年度から松くい虫防除のため、ヘリコプターで重点的に薬剤をまくスポット散布を始めたが、昨年度は二十八本も切られた。

昨年六、七月に十カ所、計七十㌶に薬をまいたが、即効性の高い薬品は弊害があると指摘されている上、国指定特別史跡の境内百㌶には、モリアオガエルやタヌキ、キツネなどの動物が多く、薬剤散布以来、「境内の動植物が減った」との声も出ている。

このため中尊寺は、長期的観点から薬剤散布を見直し、自然に優しい方向を模索している。特に、風通しや日当たりが悪い地域の松に松くい虫の被害が多いため、下草の刈り取りを進める一方、野鳥に虫を食べてもらう、など生き物に優しい散布方法を検討中。

市民の会役員

▽会長=畠昭男▽副会長=田村清、伊藤良弘▽事務局長=木口辰雄▽会計=佐藤酒嗣▽監事=大嶋賢治、納谷喜代治、佐藤浴▽幹事=浅田嘉美、安部美恵子、伊藤悦郎、木元実、下妻正順、中田雅俊、越後谷芳久、三浦正明、秩父一夫、平川賢悦、金子均

編集後記

○…昨年12月下旬に発行予定だった会報第3号が、印刷所の都合で新年に回っての発行となった。「今年」を「昨年」に手直ししての発行だった。そのためか新年らしい明るさがない内容となった。

○…会則通り年二回の発行は果たせたが、年二回の臨時発行はいろいろな面で難しいことが分かった。年四回発行のためには、スタッフの充実が先決問題。発行回数、内容などについて、全会員で再検討が望まれる。

○…第2号で、松を植栽した先駆者を取り上げたところ、越後屋渡辺太郎右衛門の子孫で十五代目の渡辺辰太郎さん=能代市中川原=からお手紙を頂いた。その内容は別項で全文掲載しているので省略するが、渡辺さんは「秋田県の広報(昭和五十一年三月号)で、先祖が植えた松の苗木が根つかず失敗したと誤記されている。風の松原会報第2号で、この誤りを指摘、先祖の名誉が回復されて感激。何度も会報を読み返した…」とあった。また、八戸市に本社のあるデーリー東北常務取締役総務局長熊野悦郎さんからは「広告も載せず会報発行は財政的にも大変でしょう」と、昨年末、十年分の会費の前納があった。親友はありがたいものである。このほかにも県内外から、激励の声が相次ぎ、その反響の大きさに、恐縮と反省―。(木口)

"先祖の功績"再確認

渡辺　辰太郎

私の人生の恩師、前八幡神社宮司故淳城先生が生前、私に対し『辰太郎お前の先祖、六代目太郎右衛門から八代目太郎右衛門まで三代にわたって、能代を砂嵐から守るため、私財を投げうって能代港から浅内浜に至る海岸線に、三十万本もの黒松を植林したことが郷土史に記録されている。お前は立派な先祖の名を恥ずかしめないような人間になれ』といつも励まして下さいました。

淳城先生は「太郎右衛門こそ能代の守護神である。能代の人は太郎右衛門のことを忘れてはいけない」と毎年、少年団の人達と太郎右衛門の墓を清掃して下さいました。

郷土史家越後昌二先生が、昭和六十年に、能代市史資料第十五号、越後屋村井文書を編さんされましたが、その序文に「秋田県広報協会刊行の広報誌あきたの昭和五十一年三月号に、正徳二年(一七一二)太郎右衛門、久右衛門らが私財を投じて松の植林を行ったが、苗木が根つかず、栗田定之丞によって植林が成功したと書いているが、県の広報誌でさえこの様な誤りを堂々と掲げている」と記述しております。

実際には、当時の佐竹藩家老大越甚右衛門が太郎右衛門父子にあてた書状には、「砂留普請に着手して二十八ケ年余り、砂山が木立に相成普請成就」とあり、砂防林普請が成功した事を藩庁が確認して居り、その功によって祖先は、苗字帯刀を許るされ、家紋とあらゆる興業物の木戸御免状を頂いて居ります。昭和六十一年には青森出身の作家鈴木喜代春先生が「動く砂山」と言う単行本を刊行しましたが、その表題に、「もし能代の海岸の砂防林がなかったら能代の街は百年以内に砂で埋っていただろう。今から二百七十年前一人の商人が砂防林づくりに立上った」と書き綴っております。能代の人達が忘れかけて居る太郎右衛門の事を青森の人が本にまとめて下さったことに何とも複雑な思いでいっぱいでした。能代公園の景林神社建立の時も、一部識者の中には、太郎右衛門、久右衛門を合祀したらという意見が出ていたそうですが、実現にはいたりませんでした。だれよりも、だれよりも、

能代を愛し、能代の街とそこに住む人々の幸せのために、三代にわたって私財を投げうって、砂防林づくりに生涯を捧げた太郎右衛門を先祖に持ったことを、私は誇りに思い幸せに思っております。そして能代の人達から忘れ去られようとしている先祖のことを、せめて一族の子々孫々に語り伝えていこうと思っております。過日、畠会長さんから、風の松原だより第二号を頂き、能代高校の古内先生の一文を拝読して、能代にもこの様な人がおられたのか、と感激し何度も何度も読み返して有難さに目頭を押えました。

畠会長さん、古内先生有難うございました。太郎右衛門は風の松原を育てる市民の会の中に永遠に生き続けて行く事でしょう。

平成三年十月(越後屋渡辺太郎右衛門第十五代目)

私と「風の松原」

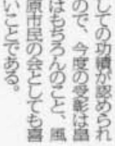
松原活用に一考

激しい砂嵐から、能代のまちを守り、今日発展の礎えとして力を与えてくれた砂防林。この大きな文化遺産を、私たちは「風の松原」の愛称で呼んでいます。

その昔、私たちが持っていた砂防林のイメージは、きのこ取りや海水浴、運動部のトレーニングで、浜へ抜ける近道として足を踏み入れるだけの、なんだか少し、暗い松林だった。

だが、手前みそになってしまいそうだが、私ども先輩の小さな勇気とアイデアが、変容のチャンスになったような気がします。それは、ゴミ捨て場砂防林をクリーンアップする事でした。当時の営林署長や、数々の団体からのバックアップ・協力を得て、昭和五十三年から十年間続けました。

今や、広場ができ、アスレチックや、ジョギング、サイクリングを楽しめる市民の憩いの場となっています。トラック何十台分ものゴミの山にうんざりしたあのころが、全くウソのようです。


伊藤　良弘氏

今、時代は、価値観の多様化と個人の尊厳という大きな流れの中で、本物が志向されています。守るべきもの、育てはぐくんでいくもの、新しく求めていかねばならないものを、正しく判断し、それぞれを調和させていくまちづくりの必要性であります。能代の場合、「風の松原」をどんな形でとらえていくかが大きなポイントになると思います。

そういった観点からしても、私たちの大切な宝だという意識や活用度について、今一度掘り下げていかなければなりません。

そして、風の松原を育てる会の一会員として、一番の関心事は、何と言っても北上を続けている松くい虫であります。西の地方で、真っ赤に枯れてしまった松の無残な姿をみる度に、先手先手の解決策を駆使していかなければならないと痛感します。財産を失ってから気づく、先人の恩では、あまりにも寂しいではありませんか。

(能代青年会議所前理事長、風の松原を育てる能代市民の会副会長)